

# 学校における「修復的正義」の米国での評価

## —道徳教育への活用に向けて—

鈴木 匡

### はじめに

1994年にオーストラリアのクイーンズランド高校に初めて修復的正義プログラムが学校で実施されて以降、ニュージーランド、英国や他の欧州諸国、そしてカナダや米国へと、学校教育における修復的正義の実践が普及しつつある。近年、この修復的正義の理念や実践は日本にも紹介されるようになり、学校における道徳教育への応用も議論されている（竹原、2018；山辺、2010）。そこで本稿では、実践と研究が盛んになりつつある米国における修復的正義の実践に関する英語文献、とりわけフロニウスら（Fronius, T. et al., 2016）のレビューに依拠してアメリカ合衆国での評価を整理したい。

Restorative Justiceの訳語について本稿では「修復的正義」と訳す。刑事司法と関連づけられ修復的司法と訳されることもあるが、本稿では学校教育に焦点を当てるため、「修復的正義」を採用する。また、修復的正義（Restorative Justice）の原理に基づく活動として、修復的実践（Restorative Practices）、修復的過程（Restorative Process）、修復的アプローチ（Restorative approach）などの用語も使用されているが、本稿では、類似の用語も含めて、「修復的正義」という語を使用する。ただし、学校現場での児童・生徒間、学校の雰囲気に関連する問題への児童生徒に対する働きかけとして修復的正義の実践を考えるなら、「修復的指導」という語の方が日本では馴染みやすく、わ

かり易いのではないかと考える。

### 定義：

修復的正義の厳密な定義というものはなく、曖昧な定義づけがなされることが多い。例えば、以下のような定義づけがよくみられる。

不適切な行動に対する創造的なアプローチで、非難や罰を与える必要性の他に、人や関係性になされた損害を修復するものである。学校における修復的アプローチは、強調する対象を、「行動の管理」から「関係性の構築、醸成、修復」へと移す。（Hopkins, 2003）

### 修復的正義が学校で利用される理由

修復的正義が、学校での問題行動への対応として利用されるようになった背景として、4点挙げられる。一点目は、特に米国で採用されてきたゼロトレランス方式が否定されつつあること。つまり、学校の安全性を高める効果がない一方、多くの生徒たちが学校を追い出された（Losen, 2014）。二点目は、人種・民族差別が懲戒の適用にみられること（Skiba et al., 2002）。ゼロトレランス方式では、違反行為の内容に応じた懲罰の公平な適用を特徴の一つとされていたが、実際には人種・民族により、例えば、他の要因を統制しても白人は黒人より甘

い処分を受けやすい。三点目は、学校における問題行動への対応が警察に委ねられ、生徒たちが公的な法制度の下で扱われるようになっていくこと。つまり、「学校から刑務所へのパイプライン」の傾向を強めていること (Petrosino, Guckenburg, & Fronius, 2012)。最後に、これまでの研究によれば、停学処分や他の懲戒処分と留年や退学には強い相関がある。処分の増加が留年や退学の増加に繋がっているといえる。(Losen, 2014)。

こうしたゼロトレランス方式の欠点が明らかになるにつれ、学校はその代替的な指導法として修復的正義を利用することで、児童生徒を学校から追い出すのではなく、学校に留め、問題行動の原因を解決することを志向しながら、子どもたちの関係を修復することを期待していることがわかる。

### **学校における修復的正義の効果に関する研究**

学校への修復的正義の利用は米国においても急速に広まりつつあるようだが、そのプログラムの発展段階は初期段階とあってよい (Guckenburg et al., 2015)。修復的正義の評価に関する文献は限られており、文献の多くが修復的正義のプログラムを紹介したものである。学校における修復的正義のプログラムとして、様々なタイプが発展している。少年司法制度から発展したものや、学校コミュニティに注目して発達したタイプもある。しかし、ほとんどの研究・報告で取り上げられている要素が3つある。それは、学校での修復的正義の実践形態としての「修復的サークル」、「修復的コンフェレンス」、それと、「被害者・加害者の仲介 (Victim-Offender Mediation)」である (Fronius, T. et al., 2016)。

効果的な修復的正義の実践に必要な要件として論じられていることは、修復的正義が学校文化 (González, 2012) やエートス (Beckman,

McMorris, & Gower, 2012) に組み込まれていることである。また、修復的正義を学校文化に組み入れる目的は、尊重や寛容を重んじ (Hantzopoulos, M., 2013)、受容し (González, 2012)、そして支持的 (Mirsky and Wachtel, 2007) な環境を生み出すこととされる。

人気が高まり普及が進んでいる修復的正義ではあるが、修復的正義の実践による学校の規律や雰囲気への影響に関する実証的な研究はまだ非常に少ない。その中でFronius, T. et al. (2016) が、今後の研究の基礎となる有望な研究を紹介している。

### **学校の規律への影響**

修復的正義の実践が計画通りできれば、次第に懲罰や問題行動が減少するとされた (Tyler, 2006)。実際、多くの研究報告で、修復的正義の実施後に、停学など排除的指導や暴力などの有害行動の減少が見られた。例えば、テキサス州の6学年の生徒たちに対して修復的正義を利用した1年間に、停学処分数が84%減少した (Armour, 2013)。また、コロラド州の学校で、修復的サークルとコンフェレンスを実施したところ、停学処分数が44%減少し、実施後の3年間で放校処分も減少した (Baker, 2009)。他にも、カリフォルニア州オークランドのミドルスクールでは、修復的正義導入前の3年間と比較し、導入後の2年間で停学処分が87%減少し、放校処分はなくなった。その後も75%程度減少した状態で推移しているという (Sumner et al., 2010; Davis, 2014)。

また、フィラデルフィア州の高校では、「暴力行為と重大な事件」が修復的正義実施後1年で52%減少し、2年目の半年で更に40%減少した。マコールド (McCold, 2002) によれば、ペンシルバニア州の修復的正義プログラム実施後3ヶ月の間に、違反 (offending) 行為が58%減少した。更に、その後2年間の修復的正義プログラム実施期間を通して、違反行為が約

50%減少した状態が続いたという。また、累犯率と修復的正義プログラム参加期間には関連があり、プログラム修了者では、そうでない者よりも違反行為の減少が見られた。その理由として、プログラム修了者は、自尊感情と向社会的態度が高まったためと考えられる (McCold, 2002)。

他にも、ミネソタ州で実施された修復的コンフェレンスのプログラムに関する予備的研究では、プログラム参加者への6週間後の自己申告による追跡調査では、喧嘩や無断欠席が減少していた。ここでも停学処分 of 明らかな減少も見られた。

### 出欠への影響

修復的正義プログラムは、生徒の常習的欠席の解消にも効果があると見られている。(Baker, 2009) によれば、修復的正義プログラム参加者では、1年間に常習的欠席が50%減少し、遅刻も64%減少した。

放校処分を受けた生徒への修復的コンフェレンスでも、出席数の増加が認められた (McMorris et al., 2013)。修復的正義プログラムを実施したカリフォルニア州オークランドのミドルスクールでは常習的欠席が24%減少した一方、実施しなかったミドルスクールでは62.3%増加したという。逆に、プログラム実施後に常習的欠席が2%増加したという報告もある (Riestenberg, 2003)。

### 学校雰囲気 (school climate) への影響

\_\_修復的正義が、安全で、支持的で、養育的な学校の雰囲気 (school climate) を作り出し、それによって生徒たちの社会・情緒面での発達に役立つのかという点に関しては、予備的研究から積極的な効果を示唆する結果が出ている。例えば、生徒間による問題解決の向上 (McMorris et al., 2013) や、意識調査の結果ではあるが職員の3分の2近くが、修復的正義

プログラムによって生徒の社会・情緒面的発達が促進され、プログラム実施1年間に学校雰囲気全体として改善したとの報告もある (Jain et al., 2014)。

### 学業成績への影響

学業成績や卒業率への影響に関する研究も少なく情報は限られているが、卒業率の改善には修復的正義プログラムが役立つことを示唆する報告がある。ジェインその他 (Jain et al., 2014) によれば、修復的正義プログラム実施校と非実施校の比較では、実施校での卒業率が3年間で60%上昇した一方、非実施校では7%に過ぎなかった。また、成績に関しては、実施校と非実施校で目立った違いはなかった (Norris, 2009; McMorris et al., 2013)。

### まとめ

修復的正義プログラムを正確に評価するには、より妥当性と信頼性の高い手法を用いた実証研究が必要ではあるが、これまでの予備的な研究からは、学校における問題行動の直接的な解決だけでなく、学校雰囲気、学業成績、卒業率増加などへの効果が示唆されている。しかし、修復的正義が普及しだしているオーストラリアやアメリカ合衆国などでも、多くの学校では依然として「伝統的な」懲罰による指導が主流である (Payne and Welch, 2017)。

日本の学校では、停学や退学などの懲戒処分や出席停止措置などは、米国と比較すれば長年極めて慎重に扱われてきたといえる。アメリカ合衆国のゼロトレランス方式のような厳格な指導法よりも、むしろ修復的正義的な手法が日本の学校教育における伝統といえる。海外の修復的正義に関する研究成果を参考にしながら、伝統的に行われてきた、問題児童生徒を排除せずにクラスや学校に再統合するような道徳教育の発展を目指す必要がある。

## 【文献】

- 竹原幸太 (2018)『教育と修復的正義 学校における修復的実践へ』. 成文堂
- 山辺恵理子 (代). (2010)『「修復的正義」の教育的意義と道德教育への導入可能性に関する研究』. 日本学術振興会
- Armour, M. (2013). Ed White Middle School restorative discipline evaluation: Implementation and impact, 2012/2013 sixth grade. Austin: University of Texas, Austin.
- Baker, M. (2009). DPS Restorative Justice Project: Year three. Denver, CO: Denver Public Schools.
- Beckman, K., McMorris, B., & Gower, A. (2012). Restorative interventions implementation toolkit. Minneapolis: University of Minnesota, Healthy Youth Development – Prevention Research Center.
- Davis, F. (2014). Discipline with dignity: Oakland classrooms try healing instead of punishment. *Reclaiming Children and Youth*, 23 (1), 38–41.
- Fronius, T. et al., (2016). Restorative Justice in U.S. Schools: A Research Review. WESTED.
- González, T. (2012). Keeping kids in schools: Restorative justice, punitive discipline, and the school to prison pipeline. *Journal of Law and Education*, 41 (2), 281–335.
- Hantzopoulos, M. (2013). The fairness committee: Restorative justice in a small urban public high school. *Prevention Researcher*, 20 (1), 7–10
- Hopkins, B. (2003). Restorative justice in schools. *Mediation in Practice*, April, pp.4–9.
- Jain, S., Bassey, H., Brown, M., & Kalra, P. (2014). Restorative justice implementation and impacts in Oakland schools (prepared for the Office of Civil Rights, U.S. Department of Education) . Oakland, CA: Oakland Unified School District, Data In Action.
- Lewis, S. (2009). Improving school climate: Findings from schools implementing restorative practices. Bethlehem, PA: International Institute for Restorative Practices
- McCold, P. (2002). Evaluation of a restorative milieu: CSF Buxmont School/Day Treatment Programs 1999–2001. Bethlehem, PA: IIRP E-Forum.
- McMorris, B. J., Beckman, K. J., Shea, G., Baumgartner, J., & Eggert, R. C. (2013). Applying restorative justice practices to Minneapolis Public Schools students recommended for possible expulsion. Minneapolis: University of Minnesota.
- Mirsky, L., & Wachtel, T. (2007). The worst school I've ever been to: Empirical evaluations of a restorative school and treatment milieu. *Reclaiming Children & Youth*, 16 (2), 13–16
- Norris, A. (2009). Gender and race effects of a restorative justice intervention on school success (Conference papers). American Society of Criminology, 1.
- Payne, Allison Ann, and Kelly Welch (2017). “The Effects of School Conditions on the Use of Restorative Justice in Schools.” *Youth Violence and Juvenile Justice*. DOI: 10.1177/1541204016681414.
- Riestenberg, N. (2003). Restorative schools grants final report, January 2002-June 2003: A summary of the grantees' evaluation. Minnesota Department of

Education.

- Sumner, D., Silverman, C., & Frampton, M. (2010). School-based restorative justice as an alternative to zero-tolerance policies: Lessons from West Oakland. Berkeley: University of California, Berkeley, School of Law.
- Tyler, T. (2006). Restorative justice and procedural justice: Dealing with rule breaking. *Journal of Social Issues*, 62 (2) , 307–326.